

春の例会に参加して

圓 山 裕

4月15日、花冷えのする広電井口駅で例会参加者を待っていた。宮島線の電車に乗ったのは何年振りだろうか。コロナ禍で停止していた本会の活動が再開する中でも、春の例会への参加は初めてだった。正直なところ、訪問前は「おこのミュージアム、オタフクソース本社工場の見学」にはそれほど興味を持てなかったのだが、展示を見て説明を聞いていくうちに、昭和のレトロな雰囲気に入り、デーツに纏わる思い出が蘇った。また、被爆80年となる戦後の広島の復興を感じるひとときでもあった。

おこのミュージアムの展示では、昭和30年代のお好み焼屋（写真1）と駄菓子屋などの商店（写真2）の再現に、「そうそう、こんなだった」と故郷の当時の商店街の風景が蘇った。特に、店舗内の什器や道具類の風情に見覚えがあったし、何よりもブラウン管の白黒テレビと雑誌「少年画報」の表紙は少年時代の記憶そのものだった。また、駄菓子屋などの商店の造作も往時の雰囲気をうまく再現していると思った。昭和27年生まれの私は、戦後の高度経済成長の恩恵を受けて成長し、平成のグローバル化の波に乗って活躍する機会が得られた恵まれた世代だと再認識することにもなった。



写真1：お好み焼屋の内部



写真2：駄菓子屋などの商店

写真3：デーツに関する説明

お好みソースの材料としてデーツが使われている（写真3）ことは知っていたが、私にはデーツに特別の思い出がある。1981年から2年間、フランス科学院の研究所に留学していた時に、徹夜で実験する機会が度々あった。大型の実験装置の運転では、フランスの旧植民地（アフリカ諸国）出身の留学生がサポートしてくれた。実験の合間の休憩時には、持参したパンや果物やワインを夜食としてアフリカ人留学生と



分け合ったが、彼等がくれたのがデーツだった。その素朴な甘味と噛み応えのある果皮が口内に長く残ったまま実験を再開したものだだった。

私自身の修業時代が懐かしく思い出され、改めてデーツを味わってみたいくなり、オタフクソース本社の売店で買ったデーツの袋が（写真4）である。デーツに関する説明に依ると、オタフクソース社が輸入するデーツの原産国は、地中海の東南沿岸の諸国となっていた。しかし、売店で買った袋に記された原産国はアメリカだったので、少し残念だった。

写真4：オタフクソース本社の売店で買ったデーツ

おこのミュージアムの見学の後、隣接するオタフクソース本社工場に移動して、ソースの製造ラインの一部と箱詰めされた製品の搬出場を見学した。（写真5）はソースが注入された容器が次々と流れてきて、ラベルを容器に貼付する装置の辺りを撮ったものである。この後に袋詰めされてお馴染みの製品（写真6）となって出荷される。飲食品メーカーの製造ラインの映像ではよく見かける場面だが、現物が目の前を高速で進んで行く様子は圧巻だった。



写真5：オタフクソースの製造ライン



写真6：お好みソースの製品
（見学のお土産として、出来立ての
温かい品物を頂戴した）

また、製造ラインの自動化と製品搬出のロボット化など、食品メーカーの省エネ化と衛生管理の取り組みに感銘を受けた。オタフクの社名とロゴの由来についても胸に響くものがあった。本社工場には、お多福のお面や人形、玩具などの収集品も飾られていた（写真7）。

広島のスoulフードお好み焼に欠かせないオタフクソースに込められた平和への祈りが感じられる見学会であった。



写真7：お多福にまつわる収集品